

# 聖書の祈りが私の祈りになる（新約編）

## 第8章 祈りについてのキリストの教え⑦



働き人のために祈る

粘り強く祈る

祈りを断食と組み合わせる



働き人のために祈る

ある人の言葉によれば、イエスは教会に祈祷課題を一つだけ残されたということです。「また、群衆を見て、羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかawaiiように思われた。そのとき、弟子たちに言われた。『収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、収穫のために働き手を送ってくださるよう祈りなさい』」（マタイ 9:36-38、ルカ 10:2 参照）。また別の機会には次のように勧めておられます。「目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています」（ヨハネ 4:35）。

幻と憐れみの無い人々は、祈るべき形では祈らないものです。しかし、憐れみとともに幻を与えてみると、彼らは「我にスコットランドを与えたまえ。さもなくば死を！」と祈ったジョン・ノックスのごとく祈るようになるのです。

一世紀以上も前のこと、W・F・アデニー教授は次のように書きました。「かつて収穫を待つ畑は、我々の時代ほど大きなことはなかった。今ほど多くの働き人が必要とされることはなかった。世界が大いに求めているものは使徒的な宣教師たちであり、キリストの精神の宿った男女なのである」。今日、収穫を待つ畑の広大さは、想像を絶するものとなっています。今日、この地球には50億以上（訳注本書執筆当時・2024年現在の世界人口は81億1900万人）の人々が住んでいます。世界の人口は30年ごとに倍になっています。この成長率が続くならば、2020年までには地球の人口は百億を超えることとなります。そして、これら一人ひとりのためにキリストは死

なれたのです。太平洋沿岸、ユーラシア、アフリカ、南北アメリカに住む無数の人々が一つところに集まる時、そこに初めて、キリストは「自分のいのちの激しい苦しみのあとを見て、満足する」(イザヤ 53:11) という結果を味わわれるのです。

問題は、どうすればそれはできるか、ということです。このような想像を絶する収穫は、どのようにすれば得られるのでしょうか。

「だから、収穫の主は、収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい」。働き人は祈りの実です。教会が歴史上、類を見ない形で祈ること、主が無数の刈り取り人を送ってくださるよう具体的に祈ることが、どれほど切に求められていることでしょうか。収穫の場に働き人が遣わされるよう祈ることは、一人の祈りの持つ影響力を大いに増幅することになります。そうして加えられた働き人がまた、祈る人となるのです。収穫の働き人であるための第一条件は、祈りの勇士であるということです。祈りは、キリストが、国々を自らの継承すべきものとして確保し、地の隅々までをその所有とされて(詩篇 2:8 参照)、御国を完全に所有されるようになるための霊的な力なのです。収穫は主のもので、主が聖霊によって働き人を召して整え、お遣わしになります。失われた魂に満ちたこの世界に出て行くに必要な、失われた魂のための熱心な愛を吹き込むことができるのは、ただ主だけなのです。

## 粘り強く祈る

イエスは、しつこい友人と不正な裁判官のたとえ話を通して、祈りの重要な教訓を教えてくださいました。どちらのたとえ話も、「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます」(マタイ 7:7-8。ルカ 11:9-10 参照) という、よく引用されるイエスの約束を例示したものとなっています。マタイ 7 章 7 節における三つのキーワード、「求める」「捜す」「叩く」は、現在形・能動態の動詞です。したがって、「受け取るまで求め続けなさい。見つけるまで捜し続けなさい。扉が開かれるまで叩き続けなさい」というのがこの箇所の意味合いとなっています。不信仰の対極に位置するのは、しつこさと粘り強さです。しつこさと粘り強さは、願う結果を手に入れるのだという決意と、あらゆる障害物に打ち勝っていく信仰を示すものなのです。

ここには明らかに、いっそうのしつこさを表現する一つの頂点があるように思われる一方、これらの言葉はそれぞれが、私たちが神からいただきたいと思っているものを違う光で提示するものにもなっている。私たちは自分の願うものを求め、自分に欠けているものを捜し、締め出されていると感じるところを叩く。この三重に表されたものに答えるということは、私たちの信仰の努力に対し、三重に成功を保証するものなのである。

聖書は、祈りに関する粘り強さを示す例で満ちています。エリヤはカルメル山で七回祈りました(1列王記 18:42-44)。ダニエルは一つの問題について 21 日間祈りました(ダニエル 10:2)。イエスは、ご自分が直面しようとしている定めについて、ゲッセマネで三度祈りました(マタイ 26:36-44)。初代教会は獄につながれたペテロのために「熱心に祈り」続けました(使徒 12:5)。パウロもおそらく、嵐をさまよう船の中で 14 日間は祈りました(使徒 27:21-25)。ですから、イエスの教えはそのまま確認されるのです。私たちは「いつでも祈るべきであり、失望してはならない」(ルカ 18:1) のです。

私たちは、勝利を得られぬうちに信仰が萎えてくると、諦めの気持ちが起こってきます。しかし、諦めの気持ちを克服しないままに、あるいは、答えの確信が得られないままに、諦めてしまう、祈るのをやめてしまうべき

ではありません。粘り強く祈り、諦めないようにという教えを、イエスは二つのたとえ話で例証されました。夜中の友人の話と、不正な裁判官の話です。

また、イエスはこう言われた。「あなたがたのうち、だれかに友だちがいるとして、真夜中にその人のところに行き、「君。パンを三つ貸してくれ。友人が旅の途中、私のうちへ来たのだが、出してやるものがないのだ」と言ったとします。すると、彼は家の中からこう答えます。「めんどろをかけないでくれ。もう戸締まりもしてしまったし、子どもたちも私も寝ている。起きて、何かをやることはできない。」あなたがたに言いますが、彼は友だちだからということで起きて何かを与えることはしないにしても、あくまで頼み続けるなら、そのためには起き上がって、必要な物を与えるでしょう。(ルカ 11:5-8)

いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。その町に、ひとりのやもめがいたが、彼のところにやって来ては、『私の相手をさばいて、私を守ってください』と言っていた。彼は、しばらくは取り合わないでいたが、後には心ひそかに『私は神を恐れず人を人とも思わないが、どうも、このやもめは、うるさくてしかたがないから、この女のために裁判をしてやることにしよう。でないと、ひっきりなしにやって来てうるさくてしかたがない』と言った。」主は言われた。「不正な裁判官の言っていることを聞きなさい。まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」(ルカ 18:1-8)

これらのたとえ話は、イエスの「他のたとえ話の数々」とは趣が違います。「というのも、これらは、比較によってではなく、対照によって教えるものだからである。……両者の共通点は、粘り強くあると願いが聞かれるというところにある。もしも多く語っているということで聞かれたわけでなければ、粘り強さが多くものを言ったというわけである」。イエスは単に、祈りにおけるしつこさや大胆さ、切迫感について教えておられるだけではありません。神が粘り強い祈りに応答してくださるということも教えておられるのです。R・A・トーレーは語っています。「神に何を求めるかについて、我々は注意深くあるべきである。しかし、ひとたび祈り始めるなら、それをいただくまで、あるいは、それが与えられるのはみこころではないということを神が非常に明白かつ決定的にしてくださるまで、決して諦めるべきではないのである」。

## 祈りを断食と組み合わせる

断食と祈りについてのキリストの教えは、非常に限られた手引きを与えてくださっているのみで、最低限のものとなっています。困難な事例を取り扱うべく備える際にはこの教えの重要性を強調されているものの、直接に教えてくださっていることは、断食の具体的な手順や手引きの詳細よりは、その動機です。ただし、キリストが断食を行うことの徳について認識しておられたことは疑う余地がありません。

断食するときには、偽善者たちのようにやつれた顔つきをしてはいけません。彼らは、断食していることが人に見えるようにと、その顔をやつすのです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。しかし、あなたが断食するときには、自分の頭に油を塗り、顔を洗いなさい。それは、断食していることが、人には見られないで、隠れた所におられるあなたの父に見ら

れるためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が報いてくださいます。(マタイ 6:16-18)

断食についてのこの教えの主要な関心事は、それを偽善の行いとしないうに、自己賞賛の誘惑に負けてしまわないようにということです。断食を勧める人は誰しも、キリストのこの懸念を心に留めておかなければなりません。そして一方では、その潜在的な落とし穴が、靈的に有効なこの行いを無視することの言い訳となるのを許すべきでもないのです。

切迫した必要のために一定の期間、断食をし、祈るという靈的な行いは、神からの認定や関心を得るための手段として見るべきではありません。断食は、それ自体に報いがあるとはいえ、その報いは、祈りの究極の目的よりも、祈る人自身に関係しているのです。祈りと断食の結果としては、靈的に正確に波長の合った認識と、強められ広げられた信仰こそが生じているべきなのです。断食をすることは、決して空虚な形式主義や神を思い通りに操ろうとする試みに堕してしまうべきではありません。しかし一方で、祈りと断食は、一人ひとりのクリスチャンや教会の歩みに対して価値ある貢献をすることができるのです。

「この種のものは、祈りによらなければ、何によっても追い出せるものではありません」(マルコ 9:29) というイエスの言葉が浮かび上がらせている、心痛む苦悶に満ちた問題は、文脈の光に照らしてみても初めて理解することができます(マルコ 9章 14-28 節を読むこと)。これは、悪霊につかれたところからの解放を成し遂げるに必要な信仰を、弟子たちが全く働かせることができなかつたことに対する反応でした。息子をお弟子さんたちの所に連れて来たのに彼らはいやすことができなかつたのです、という父親の哀れな訴えに応え、イエスは弟子たちを叱りつけられます。「ああ、不信仰な、曲がった今の世だ。いつまであなたがたといっしょにいなければならないのでしょうか。いつまであなたがたにがまんしていなければならぬのでしょうか。その子をわたしのところに連れて来なさい」(マタイ 17:17)。求められていた解放のわざを成し遂げるには、断食というところにまで及ぶほどの、集中した、切迫した祈りが求められていたのです。

祈りは神の助けを呼び招き、その人の自己を率直に神の御手に置くものである。断食は「肉」を従わせ、魂の活力を高め、人間の性質のさらに高みを作用させる。それゆえ、人は整えられ、いと高きところからの力を受ける準備が整い、悪しき者の攻撃を鎮めることができるのである。

イエスが祈りを、地上で神のみわざを達成していくための第一の鍵であると考えていたことは、その教えから明白です。祈りは、誘惑や落胆を払いのけるうえで何よりも重要です。また、クリスチャンが適切な決断を下せるよう助けてくれます。重圧が非常に高まってきて、投げ出したいと思う時にも、力を与えてくれます。イエスの教えによれば、祈りの真の中心は、私たちの必要でも意志でもありません。神が中心であり、そのみこころが中心なのです。そして私たちは、祈りの大切さを教えてくださったこの方のお名前、イエスの御名によって祈るのです。

---

## 学びのための問い

1. イエスの御名によって祈るとは、どういう意味でしょうか。

2. 「キリストにあって」という関係は、どのように維持していけばいいのでしょうか。
3. 祈りの動機として不適切なものとしては、例えばどんなものがあるのでしょうか。
4. 信仰をもって祈るとは、どういう意味でしょうか。
5. 祈りを妨げるものとしては、(赦そうとしない心に加え) どんなものがあるのでしょうか。
6. イエスが弟子たちに教えられた模範的な祈り(主の祈り)に見られる原則の数々は、私たちの祈りにも常に表れるべきでしょうか。そうだとすれば、なぜでしょうか。そうでないとすれば、なぜでしょうか。
7. イエスは「私たちの父よ」と祈るように言われましたが、イエスや聖霊に向かって祈ることに聖書的な裏づけはあるのでしょうか。
8. 神の御名をあがめるとき、聖なるものとして扱うべきお名前としては、例えばどんなものがあるのでしょうか。またそれらは、唯一まことの神のご性質やご性格について、どんなことを示してくれているのでしょうか。
9. 神の国を求めることと、みこころを行うこととの間には、互いにどんな関係があるのでしょうか。
10. 私たちの祈りにおいて、一番高い位置を占めるべき祈りの課題は何でしょうか。
11. 祈りの動機としてふさわしいものとしては、例えばどんなものがあるのでしょうか。
12. 単に同じ言葉の繰り返しである祈りと、「しつこくせがむ」祈りの繰り返しとの違いは何でしょうか。
13. 主が収稼のための働き人を多く送ってくださるようにと祈るのが大切なのは、なぜでしょうか。
14. 祈りとの関係において、断食の価値はどこにあるのでしょうか。